

神奈川県での牧野富太郎

たなか のりひさ
田中 徳久(館長)

はじめに

2023年度前期の連続テレビ小説「らんまん」で、主人公のモデルとされている^{まきのとみたろう}牧野富太郎は、日本の植物学の父とも呼ばれます。牧野は高知県に生まれ、東京大学を活動拠点の一つとしましたが、神奈川県にも深い^{ゆかり}所縁があります。ここでは、神奈川県での牧野の活動と牧野が採集した標本を紹介しします。

牧野富太郎と横浜植物会

神奈川県には、日本最古の植物愛好会である横浜植物会があります。会は、1909(明治42)年、牧野を講師に迎え、横浜市中区弁天通にあった丸善薬店に誕生しました。後に『神奈川県植物目録』(1933)^{へんさん まつのじゅうたろう}を編纂した松野重太郎ら5名が発起人でした。牧野は会の指導者として、例会(現在は観察会ですが当時は採集会)に参加し、横浜市内はもとより、神奈川県内各地、富士山方面にも足を延ばしており、標本や写真が残されています。初期の会員には、清水藤太郎や久内清孝、^{たてわきみさお たけだひさよし いとうはつたろう そうそう}館脇操、武田久吉、伊東初太郎、錚々たるメンバーが名を連ねていました(図1)。また、ヨコハマダケ(図2)やトウゴクミツバツツジ(図3)、イワシャジン(図4)など、会員が採集した標本をもとに牧野が命名した植物や、会員が発見に関わった植物ほか、会員に献名された植物が多数あります。

横浜植物会は、その後も活動を続け、2009年には100周年を迎え、100周年



図1. 横浜植物会例会. 大正6年1月21日 神奈川県立第一中学校 現・県立希望ヶ丘高等学校(伊東初太郎の孫である三谷 創提供)。



図2. ヨコハマダケの石碑. ヨコハマダケは横浜植物会の発起人のひとりである松野重太郎が発見し、牧野が1918年に記載した。碑は旧松野重太郎邸に建立されている。

記念誌『横浜植物会の歴史』を刊行しました。現在でも誕生当時と同様、月1回程度の例会を開催し、牧野の遺志を汲み、会員への植物知識の普及に努めています。また、『神奈川県植物誌1988・2001・2018』のための調査に協力し、2003年には『横浜の植物』を刊行しました。これらは標本を元にした分布図を掲載した学術的な成果で、牧野の標本に対する熱意を引き継いだ活動だと言えます。牧野の学術と普及教育に力を注いだ情熱が、会の活動にも連綿と引き継がれています。

牧野が残した植物標本

牧野は、横浜植物会だけではなく、日本各地で、それぞれの地方の植物愛好家を指導するとともに、自らも植物標本を採集しました。また、併せて指導した地方の愛好家から植物標本の同定(植物の名前を明らかにすること)を依頼されました。その生涯に収集した植物標本は40万点を超えると言われ、多くは東京都立大学の牧野標本館に収蔵されています。その中には、牧野が学名をつけ、新種として記載した植物の基準標本のほか、後に別の研究者により、別の標本に基づき新種として記載された植物も含まれます。

神奈川県に所縁のある牧野標本

神奈川県内で採集された標本に基づいて牧野が新種として記載した植物には、前述のヨコハマダケやトウゴクミツバツツジのほか、牧野自身が採集したものでは、コガネシダやタマノカンアオイなどがあります。また、今では県内から失われた植物の標本も多く残されており、ホンバイラクサ(図5)やサデクサ(図6)、ハマウツボなどがあります。後者の標本は、その



図3. トウゴクミツバツツジ *Rhododendron wadanum* Makino(ツツジ科). 1914年に牧野が箱根で採集した基準標本とされる標本(MAK100772; 東京都立大学牧野標本館蔵)。

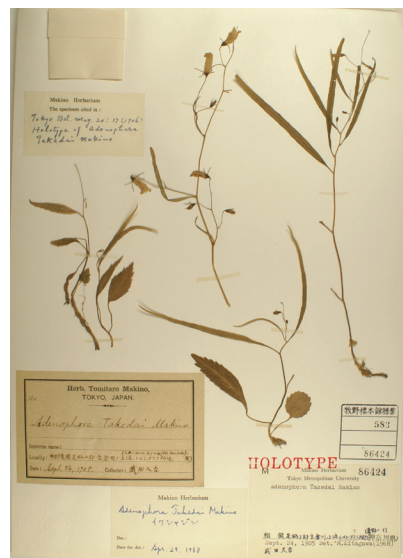


図4. イワシャジン *Adenophora takedae* Makino(キキョウ科). 1905年に玄倉川上流で武田久吉が採集した基準標本とされる標本(MAK86424; 東京都立大学牧野標本館蔵)。



図5. ホソパイラクサ *Urtica angustifolia* Fisch. ex Homem. (イラクサ科). 1920年に牧野が箱根で採集した標本. 神奈川県内では絶滅したと考えられる(MAK119389; 東京都立大学牧野標本館蔵).

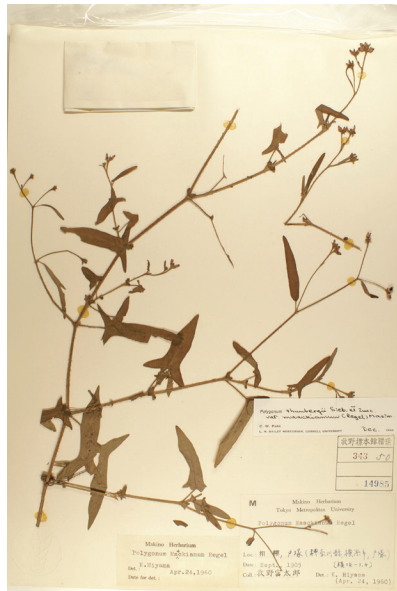


図6. サデクサ *Persicaria maackiana* (Regel) Nakai (タデ科). 1905年に牧野が横浜で採集した標本. 神奈川県内では絶滅したと考えられる(MAK14985; 東京都立大学牧野標本館蔵).

神奈川県植物誌調査会により1979年以来、調査が継続され、野外で植物を採集し、それを証拠標本とした分布図を掲載している『神奈川県植物誌1988・2001・2018』は、その調査方法とともに、高い評価を得ています。なお、神奈川県植物誌調査会による調査開始は、前出の横浜植物会の会員有志の動きがきっかけでした(村上, 1979)。

しかし、このように詳しく植物相が解明されている基礎には二つの要因があったと考えられます。一つはツェンバリーやサヴァチェ、マキシモヴィッチらの外国人研究者が、神奈川県で植物標本を採集し、研究したことです。もう一つは日本の植物研究の主役を日本人が担うようになり、首都東京に近く、自然豊かな神奈川の地で、先述のような牧野や牧野が指導した地域の植物愛好家が活動したことです。

おわりに

この原稿を皆様が読まれる頃には、ドラマ「らんまん」も佳境を迎えているかと思えます。「らんまん」の主人公は牧野をモデルにしているものの、フィクションであることは間違いありません。ですが、この1年間ほど、日本各地で牧野を題材にした展示会の開催が相次ぎ、各誌に関連記事が掲載されました。また、関連した書籍の刊行も引き続いていきます。また、これほどまで「植物採集」や「植物標本」「植物画」「植物学雑誌」の言葉が広く認識されたこともなかったように思います。今後は、この盛り上がりを一過性のものとすることなく、牧野が情熱を注いだ「標本」を、未来に引き継ぐことを博物館の大切な使命とし、活動を続けて行ければと思います。

最後に、貴重なお写真を提供いただいた三谷 創、澤田 秀三郎の各氏と横浜植物会、所蔵標本の撮影を許可いただき、使用させていただいた東京都立大学牧野標本館にお礼申し上げます。

参考文献

- 本田正次, 1978. 随想: 私の自然 (2) 箱根八里. 国立公園, (338): 12-13.
 村上 司郎, 1979. “緑の紳士録”づくりー神奈川県植物誌調査会発足についてー. 横浜植物会年報, (8): 24.

後の自然環境の変化や各種開発などで、今の神奈川県内ではその姿を見ることはできない植物が、過去のそれぞれの時点、場所に、確かに存在していた証拠として重要なものです。このような標本を「自然の証拠」として、過去から未来に引き継ぎ、継承し続けることは、博物館の重要な使命の一つです。

連綿と引き継がれる標本

当館は、牧野の標本は所蔵していませんが、牧野と同時代の澤田武太郎さわだたけたろうのコレクションがあります。澤田は東京大学植物学教室に出入りし、横浜植物会で久内清孝と知り合い、同会の講師であった牧野を師と仰ぐようになりました(図7)。澤田の標本は、新聞紙の半紙大の台紙てんぷに貼付されており、通常の標本棚には収まらず、専用の標本棚に収納しています。この標本については、「牧野博士も舌を捲いて誉めていたほど」と記されています(本田, 1978)。

牧野や澤田より古い標本は、外国人により採集されたものが多く、大部分は本国の標本庫に保管されています。「らんまん」にも登場したツェンバリーやサヴァチェ、マキシモヴィッチの標本は、それぞれスウェーデンのウプサラ大学、フランスの国立自然史博物館、ロシアのコマロフ

植物研究所に所蔵されています。これらの標本は、それぞれに採集された時代、場所の貴重な資料として、今後も未来に引き継がれていきます。

神奈川県の植物相調査

神奈川県は、その植物相(ある地域に分布している植物の種類)の全体像が最もよく調べられている都道府県です。県全体の植物目録・植物誌として、1933年に刊行された『神奈川県植物目録』から、2018年に刊行された『神奈川県植物誌 2018』まで、6編もが刊行されている都道府県は他にありません。中でも、



図7. 牧野富太郎(左)と澤田武太郎(右)箱根山中(澤田秀三郎提供; 生命の星・地球博物館蔵)。